

# 『神にとって不可能なことはない』 ルカの福音書1章26~38節

## 1. ヨハネとイエス

ルカの福音書の最初には、主イエス・キリストの誕生の物語が語られています。26節は、「六か月目」と始まります。これは何時から六か月目かというと、24節に「しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。」とあります、その次の六か月目ということです。バプテスマのヨハネの母となった、祭司ザカリアの妻エリサベツが身ごもってから六か月目です。エリサベツの妊娠の期間の後半に入った頃、ザカリアにヨハネの誕生を告げたのと同じ御使いガブリエルが、今度はマリアに、イエス様を身ごもることを告げるために遣わされたのです。このような語り方によつてルカは、イエス様の誕生とバプテスマのヨハネの誕生とを、関係にあるものとして描いていきます。後に成人したバプテスマのヨハネがイエス様の道備えをする、というだけではなくて、その誕生の前から、ヨハネの出来事がイエス様の出来事の備えとしての意味を持っていたことをルカは描き出そうとしているのです。ルカはこのあたりをよく準備し、丁寧に書いています。そのことは、ザカリアにヨハネ誕生が告げられた場面と、マリアにイエス様の誕生が告げられた場面とがぴったりと重なることから分かります。つまり先ず御使いが彼らの前に現れます。すると彼らは恐れや不安、とまどいを覚えます。その彼らに御使いは「恐れることはありません」と声をかけ、そして子供の誕生を告げます。それに対して彼らは、「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。」という思いを語ります。御使いはそれに対して、「神にとって不可能なことは何もありません。」ということを語ります。そういう話の構造が両者全く重なっています。ルカは意識してそのように物語を周到に整えているのです。そのことによって、神が周到な救いのご計画を実現していかれたことを描き出そうとしているのです。

## 2. マリアとヨセフ

この救いのご計画において、ヨハネの両親として神が選び用いられたのは、エルサレム神殿の年老いた祭司ザカリアとその妻エリサベツでしたが、イエス様を生む母として選ばれ、用いられたのは、ガリラヤのナザレに住むマリアという乙女でした。彼女はヨセフという人のいいなずけだったとあります。いわゆる婚約中だったわけですが、当時一般的に女性が、勿論本人のではなく親の意志によってですが、婚約したのは、14歳前後と言われています。ですからマリアも常識的に言ってそれくらいの年齢だったと思われます。

14歳というと中学生です。勿論今日の私たちの社会における感覚と当時の感覚とは全く違うと言わなければならいでしまうが、しかし私たちはイエス様の母となったマリアについて、知らず知らずの内に抱かされている先入観をこのことによって打ち碎かれることは確かだと思います。マリアは、成熟した、いろいろな体験を積んで分別を持った落ち着いた大人の女性ではありません。また彼女は、ガリラヤという田舎の、ナザレという名もない、町というよりむしろ村に住む、特に家柄がよいわけでもない、何の変哲もない、どこにでもいるような娘です。

聖書はマリアについて、ヨセフという、他の箇所によれば大工であった人のいいなずけとなっていた若い女、という以外のことを語ってはいないのです。エルサレム神殿の祭司ザカリアと自身も祭司の家系であるアロン家の出身であるエリサベツの夫婦と比較したら、このマリアは、全く取るに足りない者だと言わなければなりません。しかし神は、この、何ら特別な所のない一人の娘を、救い主イエス・キリストの母として選び、お用いになったのです。このことから私たちは、神の救いのご計画は、人間の思いや常識を超えた仕方で実現されることを教えられます。そしてそれは、自分のような者は神の救いのご計画とは関わりがない、などと言える人は一人もいない、ということです。神の救いのご計画は、人間の常識を乗り越えて、何ら特別な人間ではないこの私をも巻き込んで進んでいくのです。マリアはまさにそういうことを体験したのです。

さて彼女のいいなずけだったヨセフについてはここに「ダビデの家系のヨセフ」と語られています。ダビデは旧約

聖書に出てくる、あのイスラエルの最も偉大な王であるダビデです。ヨセフはその子孫なのです。それゆえに2章では、先祖の町で住民登録をせよとの勅令によって、ダビデ王の出身地であるユダヤのベツレヘムへと旅をすることになったのです。その旅先でイエス様が生まれるわけです。今は名もない庶民ですが、血筋において彼はダビデ王の子孫だったのです。このことは、**救い主はダビデの子孫に生まれる**、という預言が旧約聖書にあるのです。イエス様はその預言の成就、実現としてこの世に来られた**救い主**であることが、このことによって示されているのです。

しかしルカの福音書はこのヨセフのことをほとんど語っていません。ルカのクリスマスの物語はマリアを中心として描かれています。この点はマタイの福音書と対照的です。例えばマタイでは、**イエス様の誕生のお告げ**はヨセフに与えられていますが、ルカではそれはマリアに対して与えられており、ヨセフはそのマリアのいいなしげとして一度名前があがるだけなのです。

### 3. 受胎告知

御使いは、マリアに「**おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。**」と語りかけました。「アヴェ・マリヤ」ということばの出典はここにあります。「アヴェ」とはラテン語の挨拶用語です。「**おめでとう**」と訳されている言葉は、当然、ほかの挨拶とは異なった挨拶だと考えているわけです。もともとの意味は「喜びなさい」です。ここでは、「**恵まれた方。主があなたとともにおられます。**」という宣言と結びついていますから、マリアに対して御使いが「**おめでとう**」と言ったことばは単なる挨拶程度のものではなく、全く新しい靈的な夜明けを意味する希望に満ちた喜びの挨拶と言えます。

しかし、御使いから突然「**おめでとう**」などと言われても、マリアはとまどうばかりです。29節「**しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。**」この「**ひどく戸惑って**」は口語訳聖書では「**ひどく胸騒ぎがして**」となっていました。マリアは、戸惑っただけではなくて、不安、恐れを感じたのです。ザカリアも体験した、神と直面する時に必ず生じる恐れです。それゆえに御使いは、ザカリアに対してと同じように「**恐れることはありません**」と語りかけ、そして神が彼女に伝えようとしていることを語っていくのです。神の方から「**恐れることはありません**」と告げてなければ、私たちは神の御前に立って御言葉を聞くことはできないのです。

マリアに告げられたのは、「**あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。**」ということでした。そしてヨハネの誕生の予告と同じように、生まれてくる子がどのような者になるのか、が語られています。32、33節、「**その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。**」生まれてくるイエスは、「**いと高き方の子**」つまり神の子と呼ばれます。また彼に父ダビデの王座が与えられます。つまり彼こそがダビデ王の子孫として生まれる**救い主**なのです。彼は永遠にヤコブの家を治めます。「**ヤコブの家**」とは神の民であるイスラエルのことです。イエス様に治められるイスラエルとは、イエス様による救いにあずかる者たちの群れである教会のことです。イエス様は新しい神の民である教会を永遠に治め、その支配は終わることがない、つまり神の民に永遠の命を与えて下さるのです。このような救いが、生まれてくる子イエスによって与えられる、と御使いは告げたのです。

### 4. 神にとって不可能なことはない

このお告げに対するマリアの「**どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。**」(34節)との反応も、ザカリアのそれと重なります。ザカリアは、「**私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。**」(18節)と言ったのです。マリアは反対に、自分はまだヨセフと一緒に住んでいないから、その自分が身ごもって子を生むことなどまだあり得ないと思ったのです。「**もう**」と「**まだ**」の違いはありますが、二人共、神のお告げになったことを「あり得ない」と思ったのです。

それに対して御使いが語ったことは、ザカリアとマリアとでは少し違っています。ザカリアに対しては、**神の御言葉を信じなかつたあなたは、その事が実現するまで口が利けなくなる**、と告げられました。そこに御言葉を信じない

ことへの叱責が込められていることは確かです。ザカリアは神から叱られたのです。しかしまariaに対してはそうではありません。御使いは彼女の疑問に答えて、彼女に何が起るのかをさらに説明してくれたのです。35節「**聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。**」聖霊によって彼女は身ごもり、聖なる者、神の子である主イエスを生むのです。マリアにこのような説明が与えられたのは、彼女に対する神の慈しみと思いやりであると言えるでしょう。次の36節も、その神の力を具体的な事柄によって教え示して下さる慈しみと思いやりです。「**見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六ヶ月です。**」エリサベツが子供を授からないままに年を取っていることを親戚であるマリアは知っているのです。しかしそのエリサベツが身ごもり、六ヶ月目に入っている、妊娠の後半になり、もうお腹も大きくなってきて、誰の目にも妊娠が明らかになってきている。神の力が働くことによって、このようなことが実現するのだ、と御使いは告げているのです。つまりここで御使いはマリアに、神の力の目に見える印を示しているのです。「**六ヶ月目に**」の意味がここで分かります。エリサベツの妊娠は、マリアに、神の力の目に見える、動かぬ証拠を示し、マリアが自分に語られた御言葉を信じて受け入れるための助けとして用いられたのです。そのようにしてこの二つの話は結び合わされているのです。

このようにして御使いはマリアに、聖霊によって働く神の力が彼女を包むことを告げ、その神の力は、子がなくて年を取っていたエリサベツに子供を与えるほどに大きいことを示しました。そのしめくくりとして語られたのが37節の「**神にとって不可能なことは何もありません。**」という言葉です。これはつまり神は全能であるということです。

「**神にとって不可能なことは何もありません。**」という言葉を私たちは「神は全能であるがゆえに、まだ結婚生活に入っていない処女であるマリアが、いいなずけヨセフによってではなく聖霊の働きによって妊娠し、子供を生むという奇跡をも行うことができるのだ。」と理解しているのではないでしょうか。けれどもこの言葉は実は、それとはいさか違う意味を持っているのです。この37節の原文を直訳すると「なぜなら、神においては、全ての言葉は不可能ではないからだ」となります。原文には「言葉」という言葉があるのです。神の言葉は全て実現する、実現できない言葉はない、ということを言っているのです。そして、マリアが受け止めたのもこのことだったのです。それゆえにマリアは、この御使いの言葉を受けて38節で「**ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。**」と言ったのです。神が語られた言葉は必ず実現すると告げられたことを受けて、「**あなたのおことばどおり、この身になりますように**」と言ったのです。つまりマリアがここで信じて受け入れたのは、神は何でもできるという一般的な真理ではなくて、神は語られた御言葉を必ず実現することができる、それゆえに私に対して語られた御言葉も必ずその通りに実現して下さる、ということだったのです。「**神の全能**」の本当の意味はそこにこそあります。神が全能な方であることは、神にはあることはできるのか、このことはできるのか、と考えることによって分かっていくのではありません。神が、語って下さった恵みの御言葉を、救いの約束を実現して下さることを知ることによってこそ、私たちは全能なる神を信じることができます。

神がマリアに語り、約束した御言葉とは何だったでしょうか。それは単に彼女が神の力によって身ごもって男の子を生む、というだけのことではありません。彼女が生むその子がイエスと名付けられ、神の子、救い主となり、ダビデの王座を受け継ぎ、神の救いにあずかる民をとこしえに治める者となる、という恵みの御言葉を神は語りました。また御使いは、マリアが神から特別な恵みをいただいていると告げました。あなたは恵まれた方であり、主があなたと共におられると語ったのです。最初の「**おめでとう**」、直訳すれば「喜びなさい」という言葉も、神が彼女に告げて下さった御言葉です。神が「喜びなさい」と語って下さったのです。その御言葉は必ずこの身に実現する、神が告げて下さった喜びが自分に与えられる、マリアはそのことを信じて、その神の御手に自分を委ねたのです。それが、「**私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。**」という言葉の意味なのです。

## 5. 主のはしため

「**私は主のはしためです**」と彼女は言いました。「**はしため**」とは女奴隸のことです。奴隸が主人の命令に服従す

るよう、彼女は神に服従したのです。しかしそれは、奴隸にされ、無理やりに服従させられた、ということではありません。「私は主のはしためです」は、「私は主のはしためとして生きます」という彼女の意思表示の言葉です。主なる神に仕える奴隸として生きることを彼女は自分から選び取ったのです。どうしてそんなことをしたのか。そのことは、「おことばどおり、この身になりますように」という言葉と共に読むことによってこそ理解できます。マリアにとって、「主のはしため」となるとは、「おことばどおり、この身になりますように」と祈りつつ生きる者となることでした。彼女はこの時から、神の御言葉が自分の身に実現することを祈り求める者となったのです。それは彼女が、恵みに満ちた御言葉を聞いたからです。神が共にいて下さり、恵みを与えて下さり、彼女を選び、聖霊によって働く神の力によって包んで、ご自分のひとり子、救い主イエス・キリストを生む母として下さる、それら全てのことを通して、彼女に「喜びなさい」「おめでとう」と語りかけて下さっている、その恵みの御言葉を彼女は聞いたのです。その御言葉が必ず実現することを信じて、自分の身をその恵みの御言葉に委ねたのです。それが、「主のはしため」として生きることであり、それこそが信仰者として生きることなのです。

## 6. 本当の喜び

神の御言葉どおりにこの身に成るということは、婚約中の身で、まだ一緒にならないうちに妊娠するということです。それが何を意味し、もたらすか、世間知らずの田舎の小娘でもそれくらいのことは分かるのです。自分のお腹の子は聖霊によって授かった子ですと言った時に、世間の人々はそれを受け入れてくれるでしょうか、誰よりも婚約者ヨセフがそれを信じてくれるでしょうか、どちらも、とてもありそうにないことです。従ってこのことによって喜びどころか大変な苦しみが襲いかかって来るだらうことは目に見えているのです。しかしそれにもかかわらずマリアは、神の御言葉を受け入れ、それに従う道を選びました。それは彼女が、神が語って下さった恵みの御言葉のみを見つめ、その御言葉の実現を信じて願い求めたからこそ出来たことです。神の御言葉と、この世の目に見える現実や人間の常識が教えることを見比べて、さてどちらの方が得だらうか、どちらの方が苦しみのない、平安な、楽な歩みができるだらうか、と考えている内は、私たちは信仰に生きることはできません。信仰をもって生きるというのは、そのように両者を天秤にかけるような生き方をやめることです。そして、「おことばどおり、この身になりますように」と祈る者となることです。神が御言葉によって約束して下さっていることのみを見つめ、それがこの身に実現することをこそ祈り求めていくのです。それは決して、悲壮な決意をもって苦しみの中に飛び込んでいくようなことではありません。「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」と言ったマリアの姿には、そのような悲壮感はありません。むしろそこには、不思議な落ち着き、平安、神に自分の身を委ねた安心があるのです。信仰者の歩みとはそういうものです。なぜなら信仰者は、神の御言葉は恵みの御言葉であって、それがこの身に実現することによってこそ、本当の喜び、幸せが与えられることを、神が共にいて下さり、その恵みを受け、御業のために用いられていく本当に有意義な、生き甲斐ある、楽しい人生がそこに開かれていくことを知っているからです。

神の御言葉は恵みの御言葉です。そしてそれは神の全能の力によって必ず実現します。そのことを私たちは、毎週の主の日の礼拝において、聖書を通して示され、教えられています。神の恵みの御言葉、約束は、主イエス・キリストの十字架の死と復活において実現しました。神のひとり子であられるイエス様が、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さったこと、また父なる神が死の力を打ち破ってイエス様を復活させ、私たちに罪の赦しと永遠の命の希望を与えて下さったこと、そこにおいてこそ私たちは、神の全能の力を見ます。「神にできないことはない」。そのことは、イエス様の十字架の死と復活においてこそ分かるのです。そしてこの「できないことはない」神の恵みの御言葉が、今この私にも与えられているのです。マリアが聞いて信じたのと同じ御言葉を神は今、私たち一人一人にも語りかけて下さり、私たちの体と心、人生を用いて、その恵みの御言葉を実現させて下さるのです。